

チャプター1

直斗との日常・堂島家にて



「やったー、オムライスだー。」
菜々子が目の前のオムライスを見て嬉しそうに弾む。

今夜の夕飯は直斗が家に来て作ってくれた。
いつものオムライス合戦時の阿鼻叫喚とは違い、
直斗のオムライスは安心して食べられる。
菜々子も美味しくそうにスプーンを口に運んでいる。

「直斗おねーちゃん、オムライス作りの天才だね。」
「ありがとう、菜々子ちゃん。」
直斗は菜々子に褒められて、照れながら笑う。

「せ、先輩はどうですか？おいしですか？」
直斗が遠慮がちに訊いてくる。



こんなに美味しいオムライスは食べたことが無い、と伝えると、直斗の顔がポツと赤く染まった。

「そ、そうですか。それは良かったです……。」「
照れた直斗の声が消え入りそうなほど小さくなる。

「直斗おねーちゃん、お顔真っ赤だよ？」
菜々子が無邪気に訊ねる。

「そ、そんなことないよ、菜々子ちゃん。
あ、そうだサラダのドレッシング取ってくるねっ。」
と、菜々子にまで慌てて答えてしまっている。



直斗に夕飯のお礼を言うと、
「いい、いえ。僕で良ければいつでも作りに来ますので。」
と答える。

「ほんとう？菜々子、直斗おねーちゃんと一緒に夕飯食べたい。」
「ふふ、ありがとっ、菜々子ちゃん。じゃあ次は何が食べたい？」
「菜々子、肉シヤガがいい！」
と、仲良く会話する二人を眺める。

「先輩も食べたいものがあつたら言ってく下さい。
僕、頑張つて作るので……。」
直斗の健気な気持ちが伝わってくる。

——三人で和やかな夕食時を過ごした。





夕食の片付けが終わわり、直斗が帰る時間になった。
見送りに玄関まで来た時、体が自然と直斗を抱きしめていた。
「先輩、急にどうしたんですか？」
疑問に思った直斗が訊いてくるが、抵抗はなく、腕を背中に回してくる。
「ふふ、先輩さみしくなっちゃったんですか？」
「じゃあ、しばらくこのままで……」
直斗の華奢で柔らかかな体を抱いていると、増々離れづらくなっていく。
「先輩、好きです……。」

堪え切れなくなり、直斗にこのまま泊まって欲しいと伝えた。
「だ、駄目です。今日は菜々子ちゃんもいるし、駄目です。」
直斗が離れようとするが、それを拒むように腕に力を込める。
「先輩……。」



「ん、んんっ——」。
直斗にキスをされると、驚いて体がビクッと震えた。





「んっ、ちゅっ、先輩だめだっ、ん。」
直斗の体が強張り、唇を離そうとするが、追いかけて口をふさぐ。
「んふっ、ちゅっ、……ちゅ、んんっ。」
直斗の困った表情に胸が熱くなってくる。



次第に直斗の体から力が抜けていき、吐息に熱が込もる。
「んっ……先輩、ちゅ、んん、んちゅ」
直斗の唇も積極的に動き始める。
舌を突き出すと、直斗の舌も伸びてきて先が合わさり、絡まっていく。
「んはっ、んちゅ……あむっ、ちゅ、んん」



もう一度、直斗に泊まって欲しいと伝える。
「……はい」
心の中でガッツポーズを取りながら、直斗をギュッと抱きしめる。
「じゃあ、先輩の部屋行きましょうか……」

部屋に着くと早速、服を脱ぎ直斗に口でしてくれるように頼む。
直斗は目前の屹立したペニスにたじろぎながら、脚の間に座った。
「こ、こういつのいつまでたっても慣れないですね……」
恥ずかしがりながら、直斗の顔が少しづつペニスに近づいていく。

ソフッ





「れろっ、ん……じゅる、れろれろっ」
直斗の舌が亀頭の周りを濡らしていく。少しずつ下の方へと舌が伸びていく。ごちらの様子を伺いながら、

直斗が緊張の面持ちで、「上手にできてますか?」と訊いてくるので、
とても気持ちいいと答えながら頭を撫でると、安心した顔で笑みを浮かべる。

れろっ
れろっ

ん
ん

「じゅぽっ、じゅっ、ん……じゅるるっ」
ペニスを啜えた直斗の頭が前後に動く。口の中はヌルヌルとして温かく、
その気持ちよさに思わず、舌が漏れる。
「ぶぶっ、先輩気持ちいいですか？」
「私たちの様子を見た直斗が、口や舌の動きを大きくしていく。」

じゅぽっ
じゅっ

♡

♡

じゅぽっ
じゅっ



奥まで挿え込まれた。ペニスに限界になり、射精が近づいてくる。
「んむっ、じゅるっ、先輩出ちやいそっですか？
いいですよ、このまま、んっ、出してくださいっ。」
直斗の言葉に応えるように射精感がこみ上げてくる。





「んっ、んっ——んぶっ。」
直斗の喉奥に向かって射精する。
噴き出してくる精液に少し苦しそうになりながらも、
直斗は懸命に受け止めようとしてくれている。
「びくっ、んぐっ、んん……。」
口に溜めきれなくなった精液を飲み下しながら、射精が収まるまで
しばらく耐えなければならなかった。



直斗の口から引き抜かれたペニスにどろりと精液が垂れる。
それを綺麗にするようにペロペロと舌を動かす。
「んっ……」

直斗に気持ち良かったとお礼を言うと、恥ずかしそうに、
「先輩が気持ち良かったのなら、よかったです……」
と答えた。

直斗も服を脱ぎ、布団へ横になる。普段は隠している直斗の大きな胸が露わになり、つい見惚れてしまう。

「先輩、目が怖いですよ」

直斗がくすつと笑う。
「この胸も前は嫌でしたけど、先輩に好きになってもらえるならおっきくてよかったですと思えます」

ぷる
ぷる

おっぱい
は
ぷる
ぷる

白く柔らかそうな胸がぷるぷると揺れる。
「僕のおっぱい先輩の自由にしてもらえますか……」



直斗の胸へと手を伸ばす。もにゅっとした触り心地に指が吸い込まれていく。重量感のある柔かな胸に夢中になってしまふ。

「あ……ん、先輩ちよっと強いです」

直斗の注意もあまり聞き入れず、両手で胸の感触を楽しむ。

直斗の口からも次第に甘い声が漏れだす。

「んっ、はっ……ん……ん、ダメ、ああっ」

んっ♡

もみっ

もみっ

んっ♡

ピンっ

もみっ

胸だけでなく、乳首も徐々に刺激していく。ぷっくりとした乳首が指で挟むように刺激するとピンと硬くなっていく。
「はっっ、そこはダメですっ、ん……んん♡」

直斗の胸に吸い付く。硬くなった乳首を舌で転がし、吸い立てる。
「はあっ、あ、ああん♡やつ……あ、それっ、あ♡」
直斗が気持ちよさそうな声を上げる。

「は、あ、そんなんっ……強く吸ったらっ、あ、ああん♡」
大きくなる直斗の声に合わせて、さらに吸い付く。



空いている方の乳首も指で刺激する。

「あ、両方は刺激が強すぎですっ、ん……あんっ♡」
手と口で丹念に直斗の胸に快感を送る。
直斗はビクビクと肩や胸を震わせながら、甘い声を出している。

「ああっ、これ以上はホントにダメですっ♡、気持良くて、僕っ……」
直斗の体がビクッと大きく震える。
「あ、先輩♡、ダメっ、だめえっ」



「はあ……、はあ……」
直斗が乱れた呼吸を整えようとする。
乳首はピンと張り詰め、肩もビクンッと震えている。

「ほ、僕、おっぱいだけで……少しイッチやいました……っ」
虚空を見つめ、荒い息を吐きながら直斗が漏らす。





横たわった直斗に後ろから抱きつく。股に手を入れ脚を広げさせる。
下腹部が露わになり、恥ずかしそうに顔を背ける。
「あまり……見ないでください」
「恥じらう直斗の体に手を這わせ少しずつ下へと伸ばしていく。
「ん……先輩♡」



「ん、はんっ……あ♡」

筋にそって指でなぞると直斗が声を漏らす。そのままゆっくりと
膣の中に指を沈めていく。

「あ♡先輩の……指が入って、んんっ」
声と共に、中から蜜がじわりと染み出してくる。

「中っ、先輩にこすられてっ……ん、あん」
指を何度も抽送していると、直斗の中が次第に熱くなっていく。



「ああっ、んはあっ、んんっ——♡」
しばらく指を動かし続けていると、直斗の反応が大きくなり、
絶頂に達した膣内から、愛液が溢れ出してくる。
「あはっ、ん、先輩♡」

興奮で膨れ上がったペニスを取り出す。
「先輩も、もう我慢出来ないんですね……
いいですよ、先輩のオチンチン僕に入れてください」
直斗も興奮を抑えきれない様子で、ゆっくりと
膣口にペニスを押し当てていく。





「んあっ♥…あんっ、先輩が入ってきてます」
直斗の膣内はすでに熱くとろけていて、ペニスを奥へと誘うように呑み込んでいく。
「おちんちんっ、熱いです♥」
奥まで入った所で、すぐさま抽送を開始する。
直斗の愛液で濡れたペニスはスムーズに動き、膣内を刺激する。
「あんっ、先輩、んんっ……ああ、すごいです♥」

直斗の体を起こし、抱き合うような体勢で突き上げる。
腕の中で悶える直斗をギュッと抱きしめる。
「あん、先輩、奥まで……きつめますっ」

ズンズンと奥を突き上げると、直斗の体が震え、
耳元で快感に満ちた声を漏らす。
「ん、先輩、もっと……きゅってしてください♡」
懇願に応えるように、肩と腰を抱き寄せる。
「ひゅっ、ん、気持ちいいです……、あぁっ」





「あつ、先輩、僕もう……イキそうですっ、あつ」
「先輩がキュッと締め、その気持ちよさを……ちっちも射精が近づいてくる。」
「先輩、このまま……一緒に♡、あつ、あつ、んた」

「一緒に……イキたいっ、ひゃうっ、あんっ」
「射精に向けてラストスパートに入る。グイグイと締め付けてくる膈壁に負けないように突き入れる。」
「あ、ああん、先輩♡、先輩……っ」

「ひあつ、あつ——ああああああつあああ」
「際大きな嬌声とともに、直斗の体が大きく震える。ペニスの先端から噴き出した精液は膣奥に何度も叩きつける。」

「はあつ、奥に熱いのが広がって……んっ」
絶頂でビクビクと震える直斗の体をなだめるようにやさしく抱きしめる。お互いの熱が心地よく広がっていくような感覚に包まれる。





「はあ……、はあ……」
余韻に浸りながらしばらく一人で呼吸を整える。

「あっ、んちゅっ、ん、あむっ、ちゅ……♡
直斗にキスすると自然と応えてくれる。
「んっ……んっ……んっ、はっ、ん」



興奮は冷めず、そのまま直斗と繋がり続ける。後ろから攻め立てると、形の良いヒップが腰の突きに合わせでぶるんと波立つ。
「んあっ、あんっ…先輩♡、すごく、気持ちいいですっ……ひゅっ」
切ない声を上げる直斗の呼吸の合わせ、リズムカルに突いていく。

んっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡



再び、射精感が高まり始め、腰の抽送を少しずつ速めていく。
「ひあっ、あんっ…んんっ♡、そんなに強く突かれたらっ、
また、イッチャう…あん、んあ、強いっ…あ、ああっ♡」
直斗は増していく快感に耐えるように、枕をギョツと抱きしめ、
強くなつていく腰の突きを必死に受け止めている。

あ♡
あ♡

スチャッ
スチャッ
スチャッ

スチャッ

ビクッ

あ♡

あ♡



込み上げてくる射精感に突き動かされるように、一心不乱に腰を動かす。
「先輩♥…あんっ、あ、僕の中に全部っ、出して下さい♥
僕も…もっ、イクッ、イクッ…あっ、うあっ、ああっ…♥」



「あああつ、イクツ、イクツウ
直斗の絶頂と共に、ありったけの精液を膣奥へと流しこむ。
ツツ♥♥」

♡あー♡
♡ん♡

♡ん♡

♡ん♡

♡ん♡

♡ん♡

♡ん♡



二人共ハアハアと肩で息をしながら、じっと見つめ合う。

「先輩の熱いのが、僕の中にいっぱいになってます♡」
直斗が潤んだ瞳でそっと微笑む。


「いっぱい出ましたね先輩♡僕、腰が抜けちゃうかと思いました
でも、とっても気持ち良かったです……」

絶頂の後の程よい脱力感と充足感が二人を包む。



「先輩……キスしてください♡♡」
直斗のお願いに応えてそっと唇を重ねる。
「んっ……あん、んふっ、ん……ちゅっ」

そのまましばらく幸せな気分にながらキスを続けた……。



「ちょっと……疲れちゃいましたね」
眠るまでの間、寄り添って他愛のない会話をする。トクトクと伝わってくる直斗の鼓動の音が心地よい。

「今度お邪魔するまでに先輩の食べたいもの考えておいてくださいね。僕さんでもらせるように、きちんと料理の練習しておきますから。」
微笑む直斗に、愛しさが込み上げてくる。

「大好きです……先輩」



チャプター2

女子制服姿の直斗と



「き、着替えてきました……」
直斗に頼んで女子の制服姿に着替えてもらった。
未だに着慣れない様子で、もじもじしている姿が可愛い。い。
「この格好を見せるのは……やっぱりまだ恥ずかしいですね
もちろん……先輩にしか見せられないですけど」
顔を赤らめながら直斗が言う。



「ど、どうですか先輩……」
さらにもじもじと話す直斗。明らかに何が言っほしそうな態度に、
素直に可愛いと伝える。

「す、すみません無理に言わせみたいで……でも、嬉しいです。
先輩に可愛いって言われると、やっぱり女でよかったなって……」
直斗は少しづつ女である自分を受け入れている様で、言動にも現れ始めている。
そんな直斗を愛おしく思う気持ちが増々高まっていく。



直斗を抱き寄せてキスする。
「んっ……先輩、んっ……っ」
直斗の唇から熱い吐息が漏れる。柔らかい舌先が触れ合い、次第に大胆に絡み合っていく。



「んっ……先輩に可愛いって言われるのも、キスしてもらったのも大好きです」
直斗がキスの合間に口先から零れるように囁く。

「もっと色々してください……先輩……♡」
潤んだ瞳で訴えてくる直斗に、ドクンと胸が高鳴る。



布団に寝転んだ直斗のスカートをめくる。白く丸としたおしりが現れる。形を確かめるようにさわさわと手で撫でると、直斗が「ひゃっ」と声を上げる。「あ、あの先輩……恥ずかしいのであまり近くで見ないでください」「顔を赤くしながら直斗が言っが、そう言われるともっと困らせたくない。



パンツに手をかけ、スルスルと下ろすと、綺麗な色をした直斗の局部が顔になる。直斗が腰をよじって隠そうとするが、ガッとおしりを掴んで引き戻す。「う、うう……先輩、この格好は恥ずかし過ぎます」
口をつぐんで赤くなる直斗に冗談っぽく、可愛いと言ってみる。「い、今言われても全く嬉しくありませんっ！」





ヒクヒクと蠢く性器に顔を寄せ、割れ目を舌で舐めあげる。直斗が突然の刺激にビクンッと腰を震わせながら、声を上げる。
「せ、先輩っ、舐めるのはダメですっ……そこはダメッ……んっ、んむっ」
逃げようとするが、膣の中に向かって舌を突き出しグリグリと動かすと、すこしづつ声が艶っぽくなっていく。
「ひゃあっ、んっ舌入れちゃ……あっ、ん……ひっっ、あんっ♡」

ゴクッ

んっ

んっ

ぴちゅっ……

んっ

舌を動かしながら続けていると、膣中からトロツとした愛液が溢れてきて、唾液と絡まりクチュクチュと卑猥な音を立て始める。

「うあ、そこ……ダメです、気持ち良いっ……んんっ♡」

快感に素直になり始めた直斗にどこが気持ち良いのか訊ねる。

「ど、どこって……そんなこと言えませんっ……」

「ひゃあああ……ああっ、お、おまんこですっ……ひう、あひっ

おまんこが気持ちいいですっ……」

恥ずかしくて赤くなる直斗。羞恥心に煽られ中から大量の愛液が染み出す。

「ああっ、先輩……もうダメです、イクッ……んんっ」



クチュ

クチュ

トロトロ〜ッ

グイユッ

びゅん

おっっ♡

びゅん



「あああああっ——♥
「際大きな声をあげる直斗。膣中がギュツと締め、腰がガクガクと震える。
手を離すとそのままへタンと倒れてむ。
「はあ……、はあ……す、すごかった……」

「先輩、これでいいですか」
直斗のもっちりとした胸に包まれる。
「じゃあ、動かしますね……ん」
□や膣内とは違うムニムニとした感触と温かさに腰が痺れる。
「さっきは一方的にやられたので次は僕の番ですね♥」
直斗が悪戯っぽく笑いながら、胸をスライドさせていく。

んっ♡

たぶ♡
たぶ♡

たぶ♡
たぶ♡





「もつと気持ち良くしてあげます……」
胸だけでなく、舌を使って先端を刺激してくる。垂れた唾液で滑りが良くなり、さらに気持ちよさが増す。
「んっ……れろれろっ、はっ……じゅるっ」



「んっ……じゅるっ、じゅぶじゅぶっ……はむっ」
高まる快感に少しつつ射精が近づいてくる。
「ふは、ふふ…気持ちいいですか、先輩♥
おちんちんがさらに硬くなってますよ……ん、はむっ
僕のおっぱいに好きな時に出してください」
動きを激しくする直斗。いよいよ我慢が効かなくなって
腰が溶けるような快感にガクッと震える。

はむっ

たぶ

じゅぼ

じゅぶっ

はむ

じゅぶ

はむっ

たぶ

はむっ





「ふふっ……いっぱい出ましたね先輩♥」
微笑む直斗とは対照的に顔まで飛んだ精液が艶めかしい。
直斗にありがとうと言いながら、精液を拭う。
「えへ……どういたしまして♥」

直斗に後ろから覆い被さる。張り詰めたペニスが直斗のおしりに当たる。
「いいですよ……先輩てくださいい……」
既にぐっしりと濡れている穴にゆっくりと挿入していく。

「あんっ、ああっ……おつきい♡」
入れた途端に膣壁がギュッと締め付けてくる。



少しづつ腰を動かし始める。直斗も甘い声を漏らしながらこちらの動きに合わせて動き始める。
「はあっ、んふう……ん、あん、あっ♡」

あん♡

んふう

あぁ♡

んふう

んふう
んふう
んふう

んふう
んふう

グリグリと奥だけを捏ねる様に動くと、膣壁の動きが激しくなる。
「はああっ……それ気持ち良いっ、あんっ……ひゃうっ♡」
直斗の感じる場所を探るように少しづつ突く場所を変えていく。
「あんっ先輩、ひんっ……ああああっ」



直斗の反応が大きい場所を見極め、腰の抽送を激しくしていく。
「あんっ♥あんっ♥……あ、先輩すごいっ、あんっ」
気持ちよさそうな声と共に、体の反応も大きくなる。

「んああっ、それダメですっ、……すぐにイッちゃっう」
パンパンと力強くピストンを続けると、膣中がビクビクと痙攣し始める。
「あっ、ホントにもっっ、イッちゃっう……あん、あん、ひああっ」





「あんっ、ああっ、あんっ……んっ、イク、イクッ♡」
下から突き上げる度に嬌声を上げる。呼吸のリズムを合わせ、
二人で絶頂に向けて登りつめていく。
「ああっ、先輩、イクますっ……イクイクッ、イクッ♡」





今度は直斗に上になってもらう。下から突きながら、直斗にも積極的に動いてもらおう。
「んっ、さっきとは別の場所が擦れて、ここ……気持ち良いっ」
直斗が動く度に、こちらにも別の刺激が伝わり、またすぐに射精しそうになる。
「あんっ、先輩イキそうなんですけど、じゃあ……もっとな……」
そう言っていると、直斗の腰の動きがさらに激しくなる。
あまりの気持ちよさに堪えが効かなくなる。
「先輩、イッてください♡……んっ、あうっ」



「んあああつ、出てるっ——、いっぱい、ああああつ
ピクンツと腰が震えて大量の精液が中に解き放たれる。
膣壁がキューツと締め、精液を呑み込んでいく。
「はああつ、奥につ、奥に熱いのが広がってっ……」」





「はあっ、はあっ……先輩の、まだ出てる……」
最後の一滴まで中に注ぎ込む。最後まで出しまった所で、
直斗がパタンと倒れこんでくる。
「上になって動いて疲れちゃいました♥気持よかったですか先輩」
お礼の意味も込めてキスする。
「んっ♥……でも先輩のおちんちん硬いままですね……
まだエッチしたいですか先輩……いいですよ何回でも、
先輩が満足するまで、来て下さい♥……んちゅっ」



「ひああっ♥……先輩、先輩っ♥」
流石に体力も限界に近いので、最後のつもりで目一杯突きまくる。
「ああっ、すごい……先輩、好き♥好きっ♥」
直斗が泣きそった声で、絡めた指を強く握り返してくる。
「あんっ、僕、変に……なりそうですっ、ああっ」
乱れる直斗の膣中がギュッと締まり、降りてきた子宮とペニスの先端が「ツツツツ」とぶつかり合う。

「うああっ、もう……ダメです先輩、先輩の、僕の中にくださいっ♥、全部出してっ♥」
腰に回した脚をガッチリとホールドさせてくる。
直斗の言葉に戸惑って、射精に向けてラストスパートに入る。
「あっ♥あっ♥あっ♥先輩っ、先輩イクっ……イクイクっ」
最後にグッと大きく腰を突き入れる。





どこに残っていたのか分からない程の量の精液が出てくる。
ドクドクと流れ出す精液を子宮が呑み込んでいく。
「うあ……先輩♥……はあ、はあ」
直斗が潤んだ瞳で囁くようにこぼす。相当深くイッたようで
未だに体中がピクピクと震えている。 トクン



「一人共汗だくですね♡」
火照った直斗の体を労るように優しく何度も撫でる。
「エッチに夢中になっちゃって……」
「いっぱい、いっぱいあなたと繋がって……」
「いっぱい、いっぱい気持ち良くて……♡♡」
「幸せそうに言う直斗を愛しく思う気持ちで一杯になる。」

「おんおんのおおお……繋がってました♡♡」
「おんおんのおおお……繋がってました♡♡」

「おんおんのおおお……繋がってました♡♡」



終

「え？写真ですか……いいですけど」

(突然どうしたんだろう、普段女の子の格好しないから記念に？
あつ……か、彼女の写真が欲しいってことなのかな♡♡
お財布に入れて、肌身離さず持ち歩いてくれたりなんて……♡
それとも何かに使うのかな……って『使う』？)

ミヤビ♡

ミヤビ♡



(ま、まさか！、……いや、先輩に限ってそんなことは……
で、でも先輩も健全な一人の男性だし、もちろん一人ですること
だつてあるはず。そ、それにエッチな本や動画で興奮するくらい
なら、僕のこと考えてシテ欲しい。この格好が先輩の好みなら
いくらでも撮つて欲しい♥……つて何を考へてるんだ僕はっ
これじゃ変態じゃないかつ、それに探偵として妄想だけで物事を
捉えようとしちゃダメだつ……)



(先輩はただ僕の写真を撮りたいつて言っただけだし。)

「え、靴下を脱いで欲しい、ですか……は、はい分かりました」

(……せ、先輩……僕はあなたのこと信じてますからね！)